

日本人図案家にとっての映画雑誌

たじまなつこ
田島奈都子

(青梅市立美術館 学芸員)

映画雑誌は映画研究者にとって欠かせないものであるが、それは筆者のようなポスター研究者にも大いに役立つ。例えば、1920年代半ば以降になると、ポスター主題として映画女優が起用されるようになったものの、今となってはその人物の氏名がわからず、映画雑誌はそれを特定する手段になり得るのである。ただし、本稿で紹介するのは、日本のポスター研究に一石を投じるかもしれない、それよりも興味深い使われ方である。

さて、1931年の多田北鳥による《麒麟ビール（頬杖をつく黒い和服の女性）》（図1）は、黒地に銀のミツウロコ（三角形を重ねた模様）柄の着物を着た、女性を主題にした一般的な商業ポスターである。当時はすでにそうした特約が破棄されていたものの、麒麟ビールは長らく明治屋の一手取扱商品であり、同社の社章がミツウロコであることを知っていれば、その意を汲んで制作されたことが類推できるこのポスターは、よく練られた作品ということになり、筆者も長らくそのように考えてきた。従って、1929年9月21日発行の『キネマ旬報』第343号に《ドロシー・ガリヴァーのポートレート》（図2）を見つけたときは正直驚いた。

無声映画時代からのスターであったガリヴァーが、組んだ手を頬に添えながら、こちらに向かって微笑む姿は、当時のアメリカにおける日本の着物が、ナイト・ガウンとして珍重されていたことを踏まえて見ると、なかなか思わせぶりである。ただし、毎年麒麟ビールのポスターを担っていた北鳥からすると、ガリヴァーが着ている着物の柄こそが、翻案化する直接の動機になったのであり、結果的にこのポスターは、世に出たときから商品の背景を踏まえた秀作と認識されることになった。

この作品を描いた多田北鳥（1889～1948年）は、戦前期の日本を代表する図案家、つまり商業デザイナーであり、毎年多くの有名企業



図1：麒麟ビール（頬杖をつく黒い和服の女性）
© キリンホールディングス株式会社



図2：ドロシー・ガリヴァーのポートレート
『キネマ旬報』第343号、1929年9月21日発行

のポスターを世に出してきた。そして、これまでそれらは全て、北鳥によるオリジナルと思われてきた。しかしその実態は、ここに示したように他者が撮影した写真を下敷きすることもあった、ということであり、北鳥に関してはこれ以外にも、このような組み合わせが複数確認されている。もっとも、北鳥の名誉のために述べれば、当時の日本の図案界は、著作権に対する意識が十分に共有化されておらず、こうした行為は多作な人気図案家ほどよく見られた。

一方、図案家からすると、写真の豊富な映画雑誌は「ネタの宝庫」だったようで、戦前期に刊行された映画雑誌は、全般的にこのような用いられ方をされていた。中でも『キネマ旬報』は、魅惑

的な外国の映画や女優の写真が豊富だったことから、翻案化される機会が必然的に多くなり、そのようにして製作されたポスターは、作者や依頼主の偏りなく数多く見つかっている。

いずれにしても、このように『キネマ旬報』は、当時はポスター用原画を描く図案家に、そして現在はそれを調査研究する研究者にとって貴重な情報源となっており、同誌の内容を踏まえれば、おそらく他分野の研究においても、利活用が図れるものと思われる。復刻版の刊行によって、かつてよりも閲覧複写が容易になった『キネマ旬報』を、映画研究者だけに使わせておくのは「モッタイナイ話」である。

(掲載のテキスト、画像の無断転載を禁ずる)